

2020年度文字文化財研究所事業報告

2020年度文字文化財研究所長

【事業概要】

1. 国際 HAIKU プロジェクト「詩人と俳句——俳句と詩のバイリンガリズム」(2020年11月23日開催)

2017年度より4年間のプロジェクトとして展開してきた同企画は、いよいよ本年度で最終年を迎えることとなった。

初年度の「詩歌俳句が境界をまたぐとき——翻訳の困難さと可能性」では、西ミシガン大学よりジェフリー・アングルス氏を招き、俳句における翻訳の問題や、アメリカの詩人たちにおける禅の受容と実作の問題を捉えた。2年目の「俳句を作ってみよう!」では、当地の俳人清水京子氏を招き、参加者が俳句の実作にチャレンジ、添削を交えながら俳句の基本を身を以て知る機会を得た。3年目の「世界文学としての HAIKU」では、鹿児島国際大学よりデビッド・マクマレイ氏を招き、高校生をふくむ参加者とともに英語俳句の実作にチャレンジ、日本語による創作との違いを実感する機会を得た。

このように異言語をかたわらに実作を体感しながら、世界の中の俳句を多角的に捉えてきた本企画の仕上げとして、今回はいよいよ日本へと立ち戻り、近代詩人たちにおける俳句創作を起点とし、その原点を照らしたいと考えた。日本の近代韻文研究において、存在感を発揮している九里順子氏(宮城学院女子大学教授)と坪井秀人氏(国際日本文化研究センター教授)を招き、同じく近代韻文研究に携わっている本学の宮崎真素美を加えて、基調講演、コメント、討議によって展開した。

九里氏による基調講演「トレーニングと扉——克衛・犀星・夕爾」では、日

本の近代詩人たちが見せる俳句との深く多様な関係が、坪井氏による「コメント」では、短歌をふくめた韻文領域について、ヨーロッパの視座から日本文化を相対化する視点とともに、文芸が社会事象とも大きく関わる現代的観点が、それぞれ提示された。宮崎を加えての三者による「討議」では、それらを受けて、俳句と短歌の抒情性の問題、俳句に求められた純粹性の社会思想的な可能性と危うさ、形式性によって開かれることからや、空白の持つ意味など、俳句を起点に縦横に思考を拡げ得たことで、文芸をとおして認識される世界の多義性を感得した2時間となった。

新型コロナウイルスによる影響を受け、完全 On-line でおこなった同企画は133名の視聴者を得、その利点を追及しながらの開催となった。本誌に、その全内容を掲載した。

2. 愛知県立大学×愛知県立芸術大学《災害と文化財》シリーズ5周年シンポジウム「地域の文化財ネットワークを考える——瀬戸・長久手・豊田エリア」(2020年12月6日開催)

災害に遭遇したとき、人命はむろんのこと、我々の存在を支える歴史を形として宿す文化財もまた保護されなければならない。本シンポジウムは、そうした理念をどのように実現させてゆくかという現実的な問題の所在を明らかにし、それを具体的にする方途について、「基調報告」と「討議」によって考えた。

「基調報告」における村田眞宏氏(豊田市美術館館長)は、指定文化財でない文化財を調査し、所在等を把握していくための悉皆調査の重要性を提言、大塚英二氏(愛知県立大学教授)は、自身が代表委員を務める東海歴史資料保全ネットワークの活動事例(親から受け継いだ古文書の確認依頼、目録作成、寄贈先のコーディネートなど)とともに、来年度愛知県立大学において水浸資料の救出講習会が予定されていることを報告、阪野智啓氏(愛知県立芸術大学准教授)は、大学教育内での修復実践の報告および近隣のネットワークの重要性を強調した。

続く「討議」は、北田克巳氏（愛知県立芸術大学文化財保存修復研究所所長）を座長に、村田氏、大塚氏によっておこなわれた。文化財レスキューの人材育成、大学の担う役割、ネットワーク作り、卒業後の活躍に結びつけるカリキュラム作りの必要性、近隣地域との協同性が必要かつ現実的な要素としてあげられた。また、「人」の重要性があらためて強調されたことは印象深く、人と人とのつながりやコミュニケーション、信頼関係の構築によって世代をつないでゆくことが、災害や戦争の体験をつないでゆく有形無形の「継承」に寄与するのだという指摘は説得的であった。これらを実現するためには、地域団体がつながり、協議会を設け、災害の起きた折に被災資料を搬入できる場所など、現実的かつ具体的なシミュレーションをしておくこと、また、大学がそのなかで何をすべきかを話し合うべきとの提言とともに、地域において兼任でない専任のチームを作る必要性もあわせて強調された。

地域に根ざす種々の組織が、人を介していかにつながり、それぞれの役割を任じて果たすのか、そこに文化財保護をめぐる要点があるのだとあらためて認識された3時間であった。

新型コロナウイルスによる影響を受け、On-line と対面との併用開催をした本企画は82名の参加者を得、積極的な質疑応答もなされた。

【2020年度『文字文化財研究所紀要』（第7号）】

国際 HAIKU プロジェクト「詩人と俳句——俳句と詩のバイリンガリズム」の全内容をはじめ、地域研究、外交史、詩雑誌研究など、「文字文化」に関わる多彩な観点から構成した。

【研究所会議】

今年度の研究所会議を以下のとおり開催した。

(1) 第1回文字文化財研究所会議

開催日時：令和2年5月20日(休)

開催場所：オンライン会議

出席者：宮崎真素美、井戸聡、中根千絵、大塚英二、鎌田江利子（学務課教員センター職員）、神谷麻理子（学務課職員）

議題：令和2年度文字文化財研究所紀要について

令和2年度事業計画について

全学研究所改革にともなう文字文化財研究所のあり方について

(2) 第2回文字文化財研究所会議

開催日時：令和2年8月6日(木)～8月11日(火)（メール会議）

出席者：宮崎真素美、井戸聡、中根千絵、大塚英二、鎌田江利子（学務課教員センター職員）、神谷麻理子（学務課職員）

議題：令和2年度文字文化財研究所紀要（第7号）執筆申込者について

(3) 第3回文字文化財研究所会議（予定）

令和3年3月に収支報告を含め開催予定。

【収支報告】

2019年度の予算・決算報告は以下の通りである。

予算額894,000円

（単位：円）

項目	決算額	内容
紀要印刷発行費等	518,606	印刷、編集、発送費
講演会開催費等	265,144	講師謝金、人件費、広報費
運営費雑費等（消耗品含む）	99,000	消耗品費
合計	882,750	

予算どおり、適正に執行された。

（文責・宮崎真素美）